

障害者だって，幸せだ

兵庫県 姫路市立広畑中学校 3年
青石 奈那香（あおいし ななか）

私は，右手全指欠損しています。生まれる前からの障害で，「先天性四肢切断」と言います。「先天性」とは生まれつきのこと，「四肢」は両手と両足のことです。

私は障害について話したり，私の手のことを話したりするのが嫌です。こんな話題になるとついつい逃げたり，話をそらしたりしてしまいます。でも，私の“障害者”としての思いも知ってほしくもあり，思い切って書くことにしました。

私が気になることは，「障害者はかわいそうだ」と思っている人が多いことです。でも，障害者はそう思っているのでしょうか。少なくとも私は自分がかわいそうだとは思いません。

私は幼稚園くらいの頃によく

「かわいそうだね。」

「おててちっちゃいのにすごいね。」

と言われました。今でも小さい子にたまに言われます。もちろん，けなすつもりも，相手を傷つけるつもりもない，優しさのある言葉だと思います。でも，この姿で生まれ，生きてきた私にとっては，一番傷つく，悲しい言葉なのです。私以外の障害者の人も，きっと多くの人がこんな思いをしているのではないのでしょうか。

ほとんどの人は，手と足が左右一対で生まれてきて，それが当たり前で生活しているように，私も右の手の指が根元しかない状態で生まれてきて，右の指がないのが当たり前で育ってきました。もちろん，健常者の人と比べると少しはできる事が限られてくることもありますが，それでも今まで右手の指がなくても生活してこられたのは，私がみんなと同じように，いろんなことが出来るようにと工夫してくださるたくさんの方々のお陰です。

母は，右手を隠さないことに慣れるよう，私を物心が付く前からスイミングスクールに通わせました。一歳から，はさみを使ってお菓子の袋を開けさせたり，左手でも不便しないように，鉛筆，おはしの持ち方を教えたりといろいろな工夫をしてくれました。そんな母は，私が障害があることで，周りの人に甘えたり，気を遣わせるような行動をとったりしたときに，特に厳しく叱ります。

そして，私がうれしいなと思うのは，どんなことでも，「出来るところまで自分でやりたい。」という私の思いをわかってくれている人達がいるということです。長い間，仲良くしてくれている友達や，先生方は，私が「手伝って。」とお

願いするまで、温かく見守ってくれます。こんな風に私のことを理解してくれる人がいるのはとてもありがたいです。こんな良い環境に恵まれた私は、障害があることで、不幸だと感じることはあまりありません。

そして、私が障害をもって生まれたからこそ、出会えた人もいます。例えば、リハビリテーションセンターの友達、先生、その他にも多くの方に出会うことが出来ました。他の人には言いにくい障害の事など、何でも相談出来る人がいるのは、とても心強いし、嬉しいです。この方々の存在は、障害者であるために味わった、たくさんの辛い気持ちを帳消しにしてくれます。

健常者の方と同じように、嬉しいことがあったり、辛いことがあったりしながら、私は日々、楽しく生きています。

そんな私にとって、残念に思われることは最近よく耳にする「出生前診断」の話です。お母さんの胎内にいる赤ちゃんの検査をして、もし障害のある子どもであったら中絶するというのです。人と人がつながって、今まで何億年と続いてきた生命を、その子の将来を、人間が勝手に摘み取ってしまっているのでしょうか。確かに、診断を希望する方にはいろいろな事情があると思います。子どもに障害があれば、たくさんの苦労があり、将来への不安も大きいかもしれません。まだ中学生の私にはわからない、いろいろな思いがあると思います。だから、「出生前診断なんてよくない。やめるべきだ！」と言うことも出来ません。ですが、障害のある子どもが生まれてくることがわかると、中絶を考えるような、障害のある子どもを育てにくい社会。「障害者は不幸だ。」と考える人が多い社会は問題だと思います。このような考え方を変えるためにも、健常者と障害者の関わりの場を増やし、お互いに理解し合うことが大切だと思います。

「障害はあっても、幸せに生きていける」と誰もが思えたら、障害者も健常者も生きていきやすい社会になるのではないのでしょうか。そんな社会になるように、これからも私の思いを伝えていこうと思います。